

神の収縮（ツィムツム）

ーシェリング『世界年代』とルリアのカバラーー

永井 晋

シェリングが『自由論』以後、1810年の『シュトゥットガルト私講義』から1814、15年の『世界年代』にいたる時期にカバラー、とりわけイサク・ルリアの「ツィムツム（神の収縮）」の構想を彼の哲学の核心に据えたことはよく知られているが、その主題的な研究は極めて少ないようである。シェリングとカバラー一般の関係についての研究としてはシュルツの「シェリングとカバラー」¹があるが、とりわけ「ツィムツム」に焦点をあてたものとしては、ハーバーマスの論文²以外にはクリストフ・シュルツの「シェリングにおけるツィムツム」³がおそらく唯一のものであろう。しかしこれも、ルリアのツィムツムに関してはショーレムの研究を参考とした一般的な説明しかなされていない。以下では、『世界年代』におけるルリアの影響に関してはシュルツの論文を参照しつつ、ルリアの本来の「ツィムツム」の構想とシェリングが彼の哲学に導入した限りでの「神の収縮」の構想を対比し、前者から後者へいかなる変容が生じたのか、そしてそれによって何が得られ、何が失われたのかを検討する。

1.カバラーとは何か：「容量を超えたものを受け取る」

まず最初に、「カバラー」という言葉の字義的意味の解明から始めたい。このヘブライ語の言葉は、一般に「伝統」を意味するが、元来は「受け取る」ことである。世代を超えて「受け取られたもの」が伝統なのである。カバラーの場合、それは第一に、「弟子が師から秘密の教えを受け取ること」であるが、その起源は、モーゼが神から「トーラー」の真の（秘密の）意味を直接（口頭で）教えられた＝受け取った出来事にまで遡る。第二に、この「受け取ること」は、有限な被造物である人間が、無限（エン・ソフ）の神という「受け取りえないもの」を「受け取る」こと、「容量を超えたものを受け取る」ことを意味する。

具体的な作業としては、これは「トーラー」の文字テクストを読むこと、解釈することである。

¹ Wilhelm August Schultze, Schelling und die Kabbala, in: *Judaica XIII*, 1957.

² Jürgen Habermas, Dialektischer Idealismus im Übergang zum Materialismus, in: *Theorie und Praxis*, Frankfurt a.M., 1963/1988.

³ Christoph Schulte, Zimzum bei Schelling, in: E. Goodman-Thau (hrsg): *Kabbala und Romantik*, Tübingen, 1994, p.97–p.118.

神の収縮（ツィムツム）

カバラにおいて、文字（22 のヘブライ文字）とは、神の啓示として、無限の神が有限の文字の形に凝縮し、仮初めに世界の中に見える形を取ったものであり、「トーラー」のテキストとは、それらの文字が組み合わさって形成されたテキストであると考えられる。「受け取りえないもの」が、まず始めに、文字として「目に見える」という意味で「受け取りうる」ものとなったのである。しかしこの文字は、本来は受け取りえないもの（無限）の有限化（可視化）であるから、その中に無限の意味の奥行きを秘めている。この神の形態化としての文字テキストを神の暗号として解読する作業が解釈学としてのカバラであり、「受け取りえない」神を受け取ることの具体的な内実である⁴。

このように、「神を受け取るもの」はそれを形態化する文字およびその解釈者であるが、カバラの象徴体系の中で、これらは「器」として表象される。「容量を超えて受け止めきれない」ことは、器が割れて炸裂すること（「器の破壊」）としてイメージされ、それは、解釈者が文字を解体してそこに全く新たな意味を発見し、それによって自らも全く新たなものへと生成変化すること、さらにはそれによってメシアニックな終末の救済に接近することを意味している。

この、神の内部での神の痕跡としての文字テキストの啓示と、そのテキストの読解によって終末/救済に向かう過程を壮大な神話的イメージで表現したものがイサク・ルリアの「ツィムツム」（神の収縮）である⁵。

2.ルリアのツィムツム

16 世紀パレスチナで活動したイサク・ルリアの「ツィムツム」は、古代・中世のカバラが過去の創造の解明にもっぱら向かい、また少数の者の間での秘儀伝授的な性格を持っていたのに対して、メシアニックな未来への志向を持ち、また民衆を巻き込む社会改革運動の次元にまで拡大されたものとして、近代カバラの始まりと言われている。それは、天地創造に先立って起こった神の内部での出来事を、神の内なる三次元の時間位相によって構造化されたものとして描く（語る）ものである。その三次元とは以下のようなものである。

(I)過去=創造：ツィムツム（神の収縮）

⁴ Cf. Marc-Alain Ouaknin : *Concerto pour quatre consonnes sans voyelles*, Paris, 1991, p.13–32, « Pourquoi la Cabale ? »

⁵ この点に関して、ゲルシヨム・ショーレム『ユダヤ神秘主義』（東京、1985 年）、永井晋「神の収縮」（『現象学の転回』（東京、2007 年）を参照。

第2部【「哲学と宗教—シェリング *Weltalter* を基盤として」シンポジウム】

(2)現在=啓示：シェビラー・ハ・ケリーム（器の炸裂）

(3)未来=贖罪/救済：ティクーン（修復）

(1)ツィムツム

「創世記」の冒頭には、「始めに（ベレシート）神は天地（世界）を創造した」と記されているが、ツィムツムとは、この、神がその外部に向かって行った創造行為に先立って、「先ず始めに自己の内部に収縮した（退却した・隠れた）」という出来事（「第一の創造」）である。この原出来事の以前には神しか存在しない汎神論的な状態であり（エン・ソフ=無限）、そこには世界創造の兆しもなかった。そこで、「始め以前の始め」に神は自己の内部に収縮し、唯一の点（原初点）に凝縮した（この原初点はヘブライ語アルファベットの「ヨッド」にあたる）。それによって初めて神の中に「無の空間」が開け、そこによく神以外のもの（天地=世界）が創造される（「第二の創造」）余地が生じたのである。

極限まで凝縮した原初点は爆発=炸裂し、そこから神が光となって無の空間の中に流れ込んでくる。この光はアダム・カドモン（原人間）を形成し、10のセフィロート（生命の樹=神人同型的身体構造）として形態化する（これら10のセフィロートは神の10個の属性を表し、セフィラーの間を結ぶ22の「小径」はヘブライ語アレフベイトの22文字を表している）。これが天地創造以前の、神の内部での「過去」に起こった原初の「創造」である。

(2)シェビラー・ハ・ケリーム

神の光はさらに流出し続け、すでに形成されたセフィロートが10個の「器」となってこれを「受け止めよう」とするが、神の光の強度ゆえに、上位三つのセフィロート（ケテル・ホクマー・ピナー）を残して、第4セフィラー以下の七つのセフィラーはこの光を受け止めきれずに炸裂し、その破片が無の空間の中に無方向に飛び散ってゆく。これが第二段階の「シェビラー・ハ・ケリーム」（「器の崩壊/炸裂」）である。この割れた器の破片が文字であり、これらの文字の組み合わせによって「トーラー」のテキストが形成されるが、このテキストが「現在」における神の「啓示」である。

(3)ティクーン

さらに、これらの砕けて飛び散った器の破片を集めて元の器に修復する作業が「ティクーン（贖罪/救済/修復）」である。破片には、そこに流れ込んだ神の光の「残滓/痕跡」が付着しており、破片はそれを覆い隠している「殻」である。この殻を取り去って光の痕跡を集め、元の神の光を再現するのが修復であり、それによってメシア的終末=救済に近づくのである。修復は、

神の収縮（ツィムツム）

①解釈学的次元と②世俗的次元の両面で行われるが、①では、殻は文字であり、そこに隠された神の光の残滓は文字の隠された意味であって、「トラー」を解読して文字の中に秘められた新たな意味（ヒドゥシュ）を発見すること（ミドラシュ）がその具体的な作業となる。また、②世俗的次元では、それが社会改革運動として実践される（例えば、サバタイ・ツヴィの偽メシア革命運動）。これが「未来」の「救済/贖罪」に向かう行為である。

3.カバラーの論理：炸裂的読解

神の内部でのこの三次元の出来事は、それによって啓示された神の痕跡である「トラー」のテキストを解釈者が解釈することにおいて以下のように反復される⁶。

(1)すでに解釈されたテキストの意味から退却=収縮する（ツィムツム）。これは、具体的には、「テキストの中に穿たれた穴=無意味」である「神名」と「余白」によって行われる。すでに解釈された意味に満ちた「トラー」のテキストの只中で、「神名」と「余白」は意味を持たないものであり、この無意味の経験を通して既成の意味を相対化する。これは神の内部へのツィムツムで「無の空間」が開かれることに対応する。

(2)(1)で開かれた無意味の空間の中で、既成の、固定して自明のものとなった意味を、そこに秘められた無限の新たな意味可能性に向けて炸裂させる（シェビラー・ハ・ケリーム）。ゲマトリア（文字を数値に換算し、それと同じ数値を持つ他の言葉に跳躍的に接続する）、ノタリコン（文を分割し、組み合わせを変えて再結合する）、ツェルフ（語の文字の順序を入れ替える）などの技法によって、或る語や文を、意味的に断続した他の語や文へと跳躍的に結びつけて、一時的に別の意味地平を形成し、その中で新たに意味させる。

(3)これによって新たな意味（ヒドゥシュ）が発見される（ティクーン）が、これは被造界に現れ、意味として理解されることで再び動きを止めて凝固し、新たな意味可能性を閉ざすため、すぐさま(1)、(2)を経てさらに新たな意味可能性へ向けて解体され、炸裂させられる。

4.シェリング『世界年代』における「ツィムツム」

(1)シェリングによる「ツィムツム」の導入とその変容

⁶ 以下、永井晋「神名の現象学」（永井前掲書所収）を参照。

第2部【「哲学と宗教—シェリング *Weltalter* を基盤として」シンポジウム】

シェリングは「ツィムツム」の構想を、ペーメやとりわけエティンガーのキリスト教カバラーを通して、『自由論』からいわゆる後期の「肯定/積極哲学」にいたるまでの時期に彼の哲学に導入したが、当然ながらそれをルリアの本来のユダヤ的文脈から切り離して、キリスト教と哲学というそれとは異質の土壌に移植したのであり、ルリアの本来の構想はそこで決定的な変質を被っている。では、それはいかなる変質であり、それによって何が得られ、何が失われたのか。

シュルテが指摘するように⁷、シェリングの著作で初めてはっきりと「ツィムツム」が現れるのは、『自由論』の要約である1810年の『シュトゥットガルト私講義』においてである。『自由論』においても『私講義』においても、根本の問いは、「いかにして絶対者としての神がそれ自身のうちで差異化し、有限となり、世界の有限性において己を啓示しうるのか」、また「いかにして永遠で絶対の神は、自己自身のうちに時間の始まりを指定できるのか」というものである。

これはまさしく、上に見たように、ルリアのカバラーが、哲学とは別の次元で回答を与えた問題である。それゆえに、この問いに従来の（直接的にはヘーゲルの）哲学とは異なる新たな解決を見出そうとしていたシェリングはルリアのツィムツムを導入するのだが、彼はそこに三位一体を導入することで以下の二点を引き出そうとする。

- (1)三位一体による神の内部の構造化
- (2)神からの世界/自然の実存の発生

まずシェリングは、ペーメ/エティンガーのキリスト教カバラーにならって、ルリアのツィムツムを三位一体による神の内部の構造化として解釈し直す⁸。

- ①過去＝収縮：父/神が、過去において自己自身のうちに収縮し、隠れる。これは「怒りの神」、すなわち『旧約』の神を表す。
- ②現在＝拡張/膨張：現在において、神の愛によって息子が誕生(受肉)し、そこから全てのものが創造される。これは『新約』の「愛の神」を表す。
- ③未来：聖霊が、①「収縮/父/怒り」と②「拡張・膨張/息子/愛」の抗争を和解させる。

⁷ Schulte, 前掲論文 P.104.

⁸ 以下、主に Schulte,前掲論文 P.105 を参照。

神の収縮（ツィムツム）

これは、(1)神が、全くの無差別たるエン・ソフ(無限)の状態から、これら三つのペルソナ＝時間位相への自己展開を通して生ける神として自己を意識化し、かくして自己に回帰する動的プロセスであるが、シェリングはこの収縮を二重化することによって、同時に(2)神と、神によって産み出される世界(自然)との関係をも説明する。つまり、いかなる二元性もない無根拠なエン・ソフ(無限)の只中に、まず収縮によって根拠(父)が形成され、次いでそれに対抗する拡張/膨張(息子)によって実存する世界が産み出される。対立する二方向に向かう力の抗争の中で、後者が前者に勝った時に存在者の世界が生じるとされるのである。

ただし、『世界年代』の1810年版がこの三位一体を通した世界発生のプロセスを「無からの創造」ではなく、一にして全なる神の内部で起こる「形成」とする汎神論的立場を採るのに対し、1814、15年の版では、世界/自然は収縮によって神の外に出て神と区別されるが、なお神のうちに根拠を持っているとして、有神論との調停が計られている。

他方で、無根拠かつ無差別なエン・ソフの収縮と膨張は次のような二元的対立概念を生み出し、それら二つの対立する力の「絶えざる動的な緊張」が現実性を構成するとされる。

①収縮：実在、客観、必然性、物質、非合理、無意識

②拡張：理念、主観、自由、精神、合理、意識

ツィムツムを適宜変更して得られるこのような概念への展開によって、神は哲学の対象となるであろう。

(2)ルリアのツィムツムとの違い

再びルリアのツィムツムに立ち返って、シェリングによってキリスト教と哲学を通してそれがいかに変質させられたかを見てみる。この変質は単なる変容ではなく、正反対への転換である。

①まず、ルリアでは、収縮は「怒り」ではなく「神の愛(慈悲＝ラハマヌート)」である。神は、母胎が子を産むように、何ら根拠なき無償の愛の行為として身を退き、世界を生んだのである。収縮した神は父ではなく母である。

②収縮の後で神から生じるのは、ルリアでは「神の受肉＝一人息子の誕生」ではなく「光の流出」とそれに続く「器の炸裂」であり、その結果無方向に飛び散ってゆく無数の器の破片であり、文字である。受肉がただ一人の息子であるのに対して、炸裂した破片は逆に無数に、無方向に拡散してゆく。ユダヤ教では、文字テキストの解釈による新たな意味の発見と子の産出は、

第2部【「哲学と宗教—シェリング *Weltalter* を基盤として」シンポジウム】

いずれも「ヒドウシュ」(新たなもの)の産出として対応関係にあることを考えるなら、これはまさしく一人息子の誕生の対局の出来事である。

③このような炸裂の未来には聖霊によるいかなる調停も父への回帰もない。修復され、発見された意味はすぐさま新たに収縮して未知の未来に向けて炸裂する。未来のメシアニックな終末は約束されているが決して到来しないのである。

ルリアとシェリングの根本的で決定的な相違は、ルリアのツィムツムが、ユダヤ神秘主義として、あくまでも神の痕跡たる文字を媒介として神の内部で起こる出来事であり、決して受肉を通して神の外部の世界に現れることがない点である。確かに、神の収縮によって生じた文字とその組み合わせであるテキスト(トラー)は神が残し、そこに仮初めに凝縮した痕跡であり、それによって無限の神(エン・ソフ)は有限な、見える形態を取り、世界の境界線上に姿を現わす。しかしその文字テキストが世界の中で見え、またその意味が世界地平の中で理解されるや否や、その意味はすぐさま新たな意味に向けて解体され、炸裂してゆく。カバラーにとって神(もしくはその一性)とはこの生命の絶えざる創造的跳躍そのものに他ならず、それを構造化する(絶えず動かす)のがツィムツムなのである。

これに対して三位一体を採るシェリング、少なくとも1814、15年の『世界年代』では、神は「一人息子」キリストとして受肉し、神の外部=世界の只中に身体という物質性をまとして現れる。これは、神の生命の跳躍を可能にするユダヤ的な文字の次元を飛び越えて直接世界に現れぎり、この創造的動きを停止させることである。シェリングの収縮が拡張/膨張との対立において、無差別・無根拠のエン・ソフから直ちに対立概念からなる哲学の論理へと移行できたのはこのゆえであろう。そこでは、文字テキストという神と世界の間次元をエレメントとするカバラーの生命の論理は、概念の対立からなる疑似的な動きを対象とする哲学の論理に取って代わられるのである⁹。

以上は、「ルリアのカバラーとシェリングの『世界年代』」という難問についての、主にルリアの視点からのごく簡単な試論であるが、当然ながら問題はこれほど単純なものではない。シェリングが『世界年代』で試みたことはおそらく、本論で強調した、ユダヤのカバラーにおいて文字テキストという、神の内部でありながら世界と接する次元で展開する神的生命の論理を、三位一体と哲学を通して改めて物語ることだったのではないかと思われる。

⁹ Schulte, 前掲論文VI、VIIを参照。